

伊東乾著「法学の底の底 - 幸福論、友への手紙」を読む

- 幸福とは何か、大学とは何かを考える -

私自身は、幸福というものを

美しい心の訪れ

なのではないか、と、そう考えています。美しい心の他人^{たにん}が訪ねて来るのではありません。自分の心が美しい思いで満たされて、暖く^{すがすが}清々しい満足を覚える、ということです。 P.105

人が幸福を獲得し・維持し・増大させるためには、人間とその周囲についての、確実にして十二分な知識が必要です。そして、その人間も周囲も、既に存在論として明かにしたように、常時、動いてやまないもの、変化するものですから、その時々、最新にして確実な知識を必要とします。だから、人間の「社会」は、必ず「社会」の中に、最新にして確実な知識を集積・整理して、いつでも必要とする向きにこれを提供しうる機関が置かれていなければなりません。確実な知識を持つ機関ならば、人間の幸福のために「社会」はいま何をなすべきかを指示することも出来るでしょう。こうした、最新にして確実な知識を提供し、「社会」はいま人間の幸福のために何をなすべきかを提示する機関、それが「大学」です。 P.153 ~ P.154

「社会」は何処かに、最高・最新の知識を集積して、「社会」が個人の幸福のためにいま何をすべきかの忠告が出来る機関を持つことが必要です。これが、真の意味での「大学」、本来の意味での「大学」で、「社会」は、従って究極には総ての個人は、「大学」を必要とするのです。 P.155

伊東乾著「法学の底の底 - 幸福論、友への手紙」慈学社出版発行

大学図書発売 2006年9月30日

- 2006年8月15日記 -